

二十九日―三十日 檳榔師団長石垣島視察。

十月一日 陸軍省経理局長栗橋保正中将宮古島視察。

八日 檳榔師団長(福地参謀長、杉本参謀随員) 第卅二軍司令部で行なわれた兵棋演習参加のため、那覇へ出張(この後十日に米艦載機の大空襲が加えられた)

十六日 侍従武官坪島文雄中将来島。師団長より状況報告を聴取。陣地の一部及び中飛行場を視察、沖縄へ。天皇、皇后両陛下には師団長に目録の品を、将兵にタバコ、入院患者に御菓子を下賜された。

二十日 福地参謀長、在八重山独混第四十五旅団(宮崎少将) 兵棋演習のため石垣へ(第三十二軍八原高級参謀、はぜ山参謀参加)

十一月二十五日 卅二軍葉丸参謀来島視察。

十二月五日 長参謀長、葉丸参謀台北出張の途次連絡のため来島。

十一月 檳榔師団長、在石垣島部隊の教育及び陣地視察(杉本参謀、堀江副官随員)

十一月 軍航空参謀釜井中佐来島

二十一日 長参謀長、葉丸参謀来島、二十二、三の二日間女学校の司令部に於て宮古島防衛の図上研究のための兵棋演習実施。

(註) この兵棋演習とは彼我の態勢を想定した図面に基いて部隊記号を附したコマを動かして作戦計画を研究討議する演習で一般には大隊長以上が参加する)

第二章 敵の企図判断と作戦準備

(1) 六航軍、先島方面来攻を予測

南西諸島に対する敵の企図判断については时期的に、又大本營、第十方面軍、現地軍、航空軍などの間に多少の相違が見られるが、昭和十九年初頭以降は大体次のようであった。

一、昭和十九年五月頃における第三十二軍の状況判断

イ、マリアナの線と同時に南西諸島に進攻する。

ロ、マリアナ奪取後十分準備を整えて二段攻撃式に南西諸島を攻略する。

ハ、依然島伝い戦法を採用、ニューギニヤ、比島、台湾を経由、あるいは一部を省略、南西諸島へ進攻する。

このうちでは(ハ)の公算が大きく、その時期は二十年春頃になるものと

予想していたが、(イ)(ロ)の場合も全然公算が絶無とは云えない。更に以上何れの場合でも米軍の戦力から推して大東島のような小島に足掛がかりを求めような事はせず、南西諸島の大根拠地たるべき沖縄本島、或は宮古島に直接来攻する事が考えられた。

これにつき第三十二軍高級参謀八原大佐は戦後の回想で「現地軍では初めから敵の主攻が沖縄本島に向けられるだろうという見通しをもってしたが、反面宮古島も油断が出来ないと考えられた。」と述べているが、諸般の情勢から推して先ず沖縄本島にやってくることはほぼ間違いないとしても、状況によっては宮古島が先になるという可能性もある得るというのが当時現地軍側のほぼ一致した判断とされていた。

然し昭和二十年に入って敵の空襲が専ら沖縄本島に向けられつつあることや、執拗な偵察行動などから判断して次期進攻目標が沖縄本島に向けられることは九分通り間違いないとの見方が決定的となり、従って宮

古島の危険率はかなり薄らいだと見られた。

昭和二十年三月中旬頃に於ける大本営などの敵状判断は次の通りで、敵の次期進攻目標について決定的な判断を下していないが、二十日頃になって陸海兩統帥部共次期来攻は沖繩本島方面に四月初頭行なわれるであろうと云う点で一致している。

然しその反面二十四日から開始された沖繩群島に対する艦砲射撃について米機動部隊が九州空襲に際し日本航空隊のため、大きな損害を蒙ったので南方へ避退する途中、吐いせにやっていると軽く考え、米軍が沖繩攻略のため本格的に押し寄せせるのは未だあとのことだろうと多寡をくくっていたと云うのだから情勢判断の甘さが指摘される。

一 第十方面軍（在台北、軍司令官安藤利吉大將）

敵の次期進攻は依然四月上旬頃であるが、その方向については不明である。即ち沖繩方面は他の台湾、宮古群島と比較して特に敵の進攻企図が濃化したと判断される資料がないからである。

二 大本営

(イ)硫黄島作戦後の米軍の次期作戦方面は南西諸島中、沖繩本島或は状況により台湾方面であって、使用兵力は当初三個師内外、爾後六個師内外、作戦時期は三月下旬乃至四月上旬頃と判断される。

(ロ)米本土からハワイを経てレイテ及びマリアナ方面に対する敵輸送船団の動きは硫黄島作戦後も引きつぎ活発であって、三月上旬に於て従来の最高潮に達している。又二十年に入ってから敵潜水艦の南西諸島方面出現の増加、B 24の南大東島及び沖繩付近における三回の偵察ならびに三月中旬からマリアナ及びレイテからする哨戒機の南西諸島方面への増加等は一般戦関係と相俟って米軍次期作戦の指向方面は南西諸島方面の算大なることを示し、状況により台湾に先ず上陸することがあると判断される。又南西諸島に於てはその価値に鑑み、沖繩

本島に上陸する場合が最も多いと考えられる。

三 陸軍第六航空軍（在福岡、軍司令官菅原道大中將）

六航空軍は大本営の判断に基いて敵は概ね四月上旬南西諸島に上陸して来るであろうことを予想していた。

三月中旬六航空軍に於て実施した兵棋演習の研究結果による細部の判断は次の通りであった。

(イ)敵の攻略船団はレイテ及びマリアナ方面から行動を起こし、台湾東方海面を経て沖繩島区東方面に近接し、主力を以て沖繩本島南部西方海面に進入し、北、中飛行場方面から上陸すると共に南部（湊川）方面に一部の上陸を行なうのであろう。

(ロ)上陸は先ず機動部隊による爆撃及び上陸二三日前から熾烈な艦砲射撃が行なわれるのであろう。

(ハ)敵は事前に沖繩本島両側の制圧を行なうべく従って徳之島及び九州方面は機動部隊による反復空襲を蒙ることが予想されるが徳之島に当初から一部の上陸を見ることはないであろう。これに反し宮古島、石垣島は良好な飛行場を有するので、状況により当初から敵の上陸を見ることもある。

(2) 陣地戦を想定、火力配備

大本営では宮古島の陸上戦斗は主として陣地戦になることを考えていたので、特に強力な戦車部隊は配置しなかったが、水際戦斗に備えて戦車一個中隊を派遣した。この戦車部隊は戦車第二十七聯隊の第三中隊で主力は沖繩に送られ、沖繩戦に参加した。

同聯隊は東満の勃利で対ソ戦に備えて猛訓練に励んでいたが、戦況の急変により沖繩へ送られたもので、第三中隊の装備は九七式中戦車（十三トン、五十七ミリ砲一門、機関銃三丁）十台と九五式軽戦車（重量五トン、三十七ミリ戦車砲一門と機関銃一丁）一台から成り、本部を城辺

村長間に置き、敵上陸に備えていた。飛行場復旧作業にはブルトーザー代りに使用され、威力を発揮したが、本来の目的に副わない戦車使用方は中隊長以下に歓迎されなかったと云われる。

次に宮古島に配備された火砲は野戦重砲兵第一聯隊第一大隊の十五センチ榴弾砲を筆頭に大体次のようであった。

△海軍砲台

- 十五糎加農砲二門（平良町南岸）
- 二十糎榴弾砲二門（海軍飛行場東高地）
- 十四糎加農砲二門（城辺町友利南岸）
- 十四糎加農砲一門（平良町ビンフ高地）
- 一門（城辺町与那浜崎）
- 十二糎榴弾砲二門（平良町干瀬尾神崎）

（註・配置個所は一部明確欠く）

これらの海軍砲台は平良町、下地村方面に上陸を企図する敵艦船を撃破する目的を以て配備された。

△野戦重砲

- 十五センチ榴弾砲三門（第一中隊）伊良部村長山高地（平良港に上陸する敵を背後から攻撃する）
 - 十五センチ榴弾砲一門（第一中隊所属）平良町南岸
 - 十五センチ榴弾砲四門（第二中隊）野原越東方ウズラ嶺
 - 十五センチ榴弾砲四門（第三中隊）城辺村サツキ高地
- これらの重砲は海上及び中飛行場、野原岳主陣地一帯を防衛し得るが如く配置された。

△山砲兵第二十八聯隊

- 九四式山砲二十四門、九九式十センチ榴弾砲十二門
- △歩兵第三聯隊、同三十聯隊

- 九二式七センチ歩兵砲十二門、四一式聯隊砲十二門、三十七ミリ速射砲十二門、
- △特設迫撃砲隊 十二門

△独立速射砲第五大隊 一式機動四十七ミリ速射砲十八門

△独立混成第五十九、六十旅団歩兵大隊

- 四一式山砲十六門、九四式三十七ミリ速射砲三十二門
- 旅団砲兵 迫撃砲三十六門

以上が主なもので、この外海軍飛行場付近に十二センチ、十四センチ高角砲各二門が配置された。これらの火砲部隊は聯隊編成内の歩兵砲隊などを除き山砲第二十八聯隊長梶大佐の統一指揮下に置かれ、海軍砲台を除き、すべて地上部隊の戦斗に協力、敵戦車及び火力の撃滅に主眼が置かれ、各地区に重点的に配置された。高角砲は敵上陸後は水平射撃で地上戦斗に協力することになっていたが、一番の悩みは敵のM1、M4などの大型戦車に対する防禦法で硫黄島、サイパンの戦訓などから三十七ミリ速射砲では歯が立たないことが明らかとなり、大口徑砲で対抗せねばならないが、大口徑砲では動きの早い戦車攻撃に不便（移動、陣地転換、発射速度、秘匿などの点で）を伴ない、陣地の選定築造、訓練に苦勞を必要とし、このため歩兵による急造爆雷戦術も重要視された。

(3) 野重第一大隊の輸送

（野重第一聯隊第一大隊長高矢三郎少佐の手記）野戦重砲第一聯隊は太平洋戦争初期ヒリッピン作戦に従事したのち昭和十七年七月以降満州国黒河省神武屯に於て国境警備ならびに教育訓練に励んでいたが十九年六月下旬出動下令、鉄道により奉天經由、釜山に到着した。

行先地については一切知らされなかったが、のちになってサイパン逆上陸作戦に使用されることになっていたことを知らされた。釜山に数日間滞在中、大本営の方針変更により南西諸島防衛に充てられることになり、第九師団の將兵と同船で門司、鹿児島に寄港したのち那覇に至り、第三十二軍司令官の指揮下に入った。その後船便で戦車中隊、独立工兵隊（上陸用舟艇部隊）と共に宮古島に送られ、第二十八師団長の指揮下に入った。時期は七月下旬又は八月月上旬。

宮古島に於ては始め城辺国民学校に宿営、民間人の協力を得て洞窟陣

地の構築作業を中心に作戦準備を進めたが、爆薬・コンクリートなどの資材乏しく、苦勞を極めた。

同年十月第一中隊（一門欠）を伊良部島に派遣、混成旅団長の指揮下に入らした。任務は同島の防衛及び平良港方面に上陸を企図する敵を背後から攻撃するのが主であった。

大隊主力は山砲兵第二十八連隊長梶大佐の指揮下に入った。大隊の装備は十五センチ榴弾砲十二門（三個中隊、四門づつ）で保有弾薬は金山に於て六千発補給を受け、合計一万発余りだった。大隊の主要幹部将校は次の通り。

- 大隊長 少佐 高矢三郎
- 副官 中尉 片岡 明
- 指揮班長 中尉 姫野寛一
- 第一中隊長 大尉 三上
- 第二〃 中尉 杉江
- 第三中隊長 大尉 川戸康介
- 段列中隊 欠
- 人員総計 七百名

(4) 衛生部隊の臨戦準備

衛生関係部隊の配備及び行動、臨戦準備の概要は次の通りである。

- 師団軍医部
 - 部長 医大佐 脇田 豊
 - 医少佐 打田 直
 - 医少佐 山田 豊
 - 医大尉 三留千早
- 昭和二十年二月迄は平良第一国民学校々舎内に位置、二月中旬以降は野原越戦斗司令部へ移動
- 野原越戦斗司令部へ移動
- 宮古島陸軍病院 医少佐 恒松陽之助
- 鏡原国民学校に位置 一部を以て狩俣分院

(ロ) 栄養失調対策

二十年三月以降補給は全く絶え、手持ちの糧秣だけで全將兵をまかなわねばならなくなった。而もあと何年間持たずればよいか、見通しがつかないので、極力節約につとめ、食いつまみ延ばしを図った。同時に現地自活に力を入れ、鳥類虫類は勿論野草に至る迄食いつまみ得るものを調査し、活用せしめたが、不十分免れず己むなく軍馬肉を定期的に給する方途を講じた。主食は保有の米をなるべく消費しないように努め、手取り早く増収を望める甘藷を代用食に充て大豆を以て蛋白源、食塩は海水（小規模な塩田があった）より細々乍ら自給するようつとめた、漁獲物を得るため漁撈班を組織して魚類の入手につとめたが、昼間は敵機の妨害に遭い所期の効果をあげることが出来なかった。このため大豆の栽培に力を入れ台湾から熱地に適する白大豆の種子を急ぎ飛行機で取り寄せるなどして極力増収に努めた。又豚、山羊、鶏などは一定数迄増える迄は手をつけないようにして増産維持をはかったが、劣悪な給与と過重な陣地構築作業、訓練などで將兵の体力低下は目に見えて増え、健康維持は至難の状態だった。

(イ) 衛生材料の補給

補給は全く望めないため手持ち材料を有効に活用すると共に草根、木皮等を原料として種々薬品を製造、使用した。

(ニ) 給水対策

宮古島には井戸が少なく飲料水確保に苦勞した。これがため野戦作井隊による作井を試みたが、地質の関係で成功しなかった。このため雨水を利用する外各地区の湧水を防疫給水部の手でろ過して飲料水に供した外野原越の湧水については貯水池を造って有事に備えた。

第二十八師団第一野戦病院
医大尉 和田錬作

城辺村花切に位置、二十年五月四日平良町盛加に移動

第二十八師団第四野戦病院

医大尉 辻 義春 城辺町福里に位置

〃 〃 防疫給水部 医少佐 大科達雄

〃 〃 平良町細竹、一部を各地区隊に配置

〃 〃 第二野戦病院 医大尉 三好祝二

〃 〃 伊良部島、一部を大東島

(註) 第三野戦病院は石垣島へ派遣

△軍陣医療業務

師団は戦況急変のため、準備不十分のまま宮古島に転進、更にその後補給意に委せず、医薬品、衛生材料にこと欠き、特にマラリア防遏に必要な塩類、硫規、アテブリン、殺虫剤などの不足著しく、風土病の予防対策は困難を極め、衛生状態の悪化は避けられなかった。

(イ) マラリア対策

三万名に近い將兵の進駐で食糧、住居などに不自由を来し、マラリアなど風土病の蔓延と栄養失調患者の続出で体力の疲弊消耗著しく、戦力の低下は憂慮すべきものであった。

このため師団衛生部ではマラリア防遏対策に重点を置き、台北帝大熱帯医学研究所の宮原、大森両教授を招いて五日間にわたって全軍医の教育を実施したのを手始め、蚊の発生源を塞ぐ目的で全島にわたって水流溝渠の整備、水田、廃田、池などの埋立て、雑荒雑木の伐採、兵舎内外の清潔清頓、予防内服の徹底をはかると共に原虫保持者の早期発見、区分を迅速確実ならしめるため、布施中尉を長とする専門工作班を編成、台湾軍から派遣されたはん文虫ら六名の技術者を配し、軍民の原虫検索を徹底的に実施して予防につとめた。

(ホ) 戦斗開始に伴なう戦傷者収療計画

(註) 宮古島に於ては敵の第一波攻撃に於て数千名の死傷者を生ずることを予測して対策が樹てられたが、民間人はこの計画には含まれていないと解される。

方針

傷者収療の重点を迅速適確なる患者収容に指向し、師団戦斗の進展に支障なからしむると共に初療の普及並びに完成に遺憾なきを期し以て極力長期の人的戦力の維持を図らしむ。

指導要領

(1) 部署

全員戦斗配置に就く時期を以て衛生部員、特設患者収容隊（衛生隊を欠く隊に於て編成したるもの）共に配置に就く。

(A) 隊付衛生部員（略）

(B) 特設患者収容隊

平良町更竹付近に位置し戦斗開始と共に傷者発生状況に即応し各小地区を分担せしむ、之が部署は最小限分隊単位とす。

(2) 収療施設

イ、傷者溜場は各陣地棲息掩蔽部に設置し、予じめ温存材料を準備す。

ロ、収療拠点は各地区毎に数ヶ所設け何れも地形地物を利用すると共に地下施設を構築す。

ハ、繃帯所は各大隊毎に設くるも状況により隣接大隊或は他隊の衛生部員と協同して開設す。

ニ、第一野病は細竹、盛加の中間付近に洞窟病院を施設し主として北地区、東地区の傷者を収療す。状況之を許せば野病よりの傷者

を収療す。

ホ、第四野病第一半部は更竹付近に洞窟病院を施設し主として南地区、中地区及び東地区の傷者を収容す。

ヘ、陸病は増原西方六三高地付近に洞窟病院を施設し、主として北地区、南地区の傷者を収療す。状況之を許せば野病よりの傷者を収療す。

ト、陸病狩俣分室は本院に合す。

チ、野病、陸病の移動時期は甲戦備発令直後とす。

リ、各衛生機関共に対空対策（偽装等）対ガス対策（隔障設置等）の考慮をなしおくを要す。

ヌ、第四野病第二半部は更竹司令部付近に位置し予備とす。傷者統出するに至れば一部を以て挺進し初療普及に勉むるも機を見て更竹付近迄後退し第一半部と共に南、中、東地区の傷者を収療す。ル、第四野病、陸病を含む地域を傷者巣とし大体この地域に傷者を集結す。

(3) 収容更送 (4) 輸送の強化 (5) 治療(以下略)

() () ハンセン氏病対策(略)

(註) この部分は元第二十八師団軍医部長脇田軍医大佐の手記を基として記述した。

(5) 水上特攻船隊の配備

戦争末期の日本軍が開発した新兵器の一つに水上特攻艇があげられる。これは敵が上陸してきそうな沿岸に配備、夜間を利用して主として輸送船に体当たり攻撃を加えようと云うもので、木造合板(ベニヤ板)全長およそ五メートル、排水量一、四トン、乗員一名、艇首に二五〇キロの炸薬を装備、二十三ノットの快速度が出せ、小型で軽快に行動できるように設計されている。戦闘開始前は海岸の秘匿壕に格納、出撃の時は人力

で海上に運び出される仕組みで、この作業のため基地隊が配属されていた。宮古島に配備されたのは陸軍の海上挺進第四戦隊(マルレ型)海軍が震洋型一戦隊。陸軍は金子昌功少佐(五十一期)が指揮して昭和二十年一月下旬慶良間列島の渡嘉敷島からおおよそ百隻が船団を組んで宮古島へ向かったが、途中悪天候に災いされてバラバラになり、一部は台湾へ漂着するという不首尾で、主力が宮古島に集結した頃は艇数は二十乃至三十隻に減じ、人員も六十名足らずだった。同大隊は基地大隊の協力を得て平良町下里俗称トリバー沿岸に秘匿壕を掘り、艇を格納して戦闘に備えた。平良港方面に敵が上陸を企図した場合、体当り出撃の段取りだった。

一方海軍の震洋型はおおよそ五十隻が城辺村友利海岸に配置され、下地村南岸に上陸する敵に備えていた。

この水上特攻艇が初めて使用されたのは米軍が比島リンガエン湾に上陸した時からだ。船体が脆く、防禦力皆無、一発でも敵弾を受けると行動の自由を失うので、期待された戦果は上らなかった。沖繩戦では慶良間列島に相当数配備されたが、敵が機先を制して同列島に上陸したため、殆んど無為のまま全滅した。

(6) 航空部隊の展開

大本営では敵が南西諸島に攻めた場合は所在の地上軍と相呼応して台湾及び九州に航空兵力を結集して大々的な特攻々々撃を加え、敵艦船を海上で撃滅する方針を樹てていたが、一部を沖繩各基地にハリつけ、至近距離からの特攻を準備した。

海軍は棚町整大佐麾下の南西諸島航空隊の一部が宮古、石垣島に派遣され、陸軍は在台湾第八飛行師団麾下の第九飛行団(柳本栄喜大佐、二十年二月比島から台湾へ移動、同月下旬石垣島に戦司令部開設)に属する特攻隊が宮古島の各基地に次の如く展開した。

第二十四飛行戦隊(戦斗機十機)
独立飛行第四十一中隊(偵察機十機)

誠第一一五飛行隊(特攻機十機)

〃 一一六 〃 〃

この外誠第三十九、同四十飛行隊(特攻機合計二十機)が宮古島に配置されることになっていたが、実施されなかった。

これらの特攻機は沖繩戦に出動参加したが、飛行場の掩体施設が不十分で且強力な防空隊(陸軍高射砲隊などの配置がなかった)を持たなかったため、地上で撃破されたりして所期の特攻戦果は収められなかったようである。

第三章 防衛方針を水際作戦に

(1) 攻めるに易い宮古島

十九年秋に入るや敵潜水艦の出没頻り、又敵機動部隊近接の情報相次ぎ戦場化必至の状況となってきた。集団では敵来攻に備えて陣地構築、飛行場の整備、対敵訓練、武器弾薬、軍需資材の集積などに全力を傾注軍官民をあげての防衛態勢の完璧が期せられた。

孤島の防衛についてはサイパン戦の戦訓などから推して友軍海空軍の全面的協力は期待出来ず、制海制空権を奪われた戦いでは兵力の増援補給は考えられないので、戦略持久戦法は可能性がうすく、再度にわたる兵棋演習の結果、宮古島では持久戦法は採用せず、敵上陸時に於て水際に兵力を重点的に集中、一気にこれが殲滅を図る水際決戦方式がとられることになった。そして状況万止むを得ざる場合でも極力敵の飛行場利用を妨害すべく野原岳を中心とする主陣地復廓陣地に拠って持久出血戦法をはかるといのが宮古島防衛の骨子であった。

この作戦計画は主として福地参謀長が立案したと云われ、細部について「宮古島戦斗教令」が基本となっている。宮古島は地形的にみて東部は断崖が海岸に迫っているので上陸(戦車や器材の揚陸が困難)には不

向きとされ、これに反し南部は平坦な海岸線がつづき飛行場に近く、敵上陸の可能性が大きいと云うのが戦術上の常識とされた。

宮古島防衛上の地形的難点として

イ、島が狭小で四囲から艦砲射撃を受けるおそれが大きい。

ロ、上陸可能地が多い。

ハ、島全体が平坦で敵上陸後その前進を阻止する地形上の障害が乏しい。

ニ、飛行場が上陸予想地点に近く防衛が難かしい。

などが挙げられ、反面これが敵にとって上陸後拠るべき遮蔽物が少なく、日本軍の反撃に曝露される欠点ともされた。陸路参謀はこれにつき一番苦心したのは戦車の進攻を阻止する川やクリーク、沼などが殆んどなかったことで、敵が上陸後大戦車団で一気に正面突破を強行してくると有効な防禦方法がなかったのではないかと述べている。

米軍の上陸予想地としては次の要素から平良港付近、下地村宮国一嘉手刈一带、白川湾付近が考えられ、この方面の配備に重点が置かれた。

イ、海岸が平坦で上陸が比較的容易である。

ロ、上陸支援に適している(艦砲射撃のための行動が容易)

ハ、上陸後平坦地区を一気に島の中心部に殺到するのに適して居り、